

もぐら打ちは子どもたちが  
人間関係を築く良い機会

小水流子ども会会長

よこやま ひでかず

横山 秀和 さん(37)

小水流集落への転入者が少しずつ増え、昨年度は小学生の数が13人、今年度は16人となりました。それに伴い、「もぐら打ちを子どもたちにも経験させ、継がせたい」という声が上ががり、昨年復活させることができました。この行事は年上の子が年下の子をまとめ、人間関係が築かれる良い機会です。今年は学校や仕事の都合もあり、小正月前の1月10日(土)に行います。今後も日程など、柔軟に対応をしながら何とか続けていきたいと考えています。



子どもたちが地面を叩くのに使う、竹の先にワラと縄を巻き付けた棒「ホテ」。

伊佐市大口里／小水流集落  
もぐら打ち

子どもたちが主役の  
五穀豊穡を祈る伝統行事

「もぐらうちやとがなし(もぐら打ちは、罪はありません)、あわんもちやいらんで(粟の餅はいりませんので)、しらもちよくいやん(白い餅をくださいませんか)」

底冷えのする1月14日、小正月の夜、伊佐市大口里の小水流集落の家の庭先に、子どもたちの大きな歌声が響きます。声の主は、大口小学校の児童たち。冒頭のはやし唄を歌いながら、細い竹の先端にワラと縄を巻き付けた「ホテ」という棒を地面に叩き付けます。これは、「もぐら打ち」という、小正月に行われる伝統行事。水田を荒らすもぐらを追い払い、五穀豊穡を祈るものです。かつては伊佐市内各地で見られましたが、行事を行う地域は年々減り、小水流集落では平成15年を最後に中断。平成26年、11年ぶりに復活しました。

「小学6年生を中心に2班に分かれ、全64戸を2時間ほどかけて回ります」と説明するのは、小水流子ども会会長の横山秀和さん。6年前、この地に移り住み、自治会の青壮年部

鹿兒島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな伝統行事祭りが残っています。今回はそんな伝統行事の中から伊佐市大口里の小水流集落に伝わる「もぐら打ち」をご紹介します。

と共にこの伝統行事を復活させた一人です。「起源はわかりませんが、元々は男の子の行事。大人が手伝うのは、ホテ作りだけで、行事はすべて子どもに任されていました。夜、子どもだけで、もぐら打ちに出かけ、各家庭でもらった餅や菓子や米袋いっぱいに入れて帰り、皆で分けるのが楽しみでしたね」と語るのは青壮年部の小水流英樹さん(52)。

「疲れたけど楽しかった」と昨年の様子を教えてくれた下須崎裕也くん(12)は、今回、下級生の指導役に回ります。

「もぐら打ち」は、子どもの結束力や自立を育てる大切な行事でもある――。それを実感する大人たちによって守られています。



伊佐市

伊佐市は、平成20年に大口市と菱刈町が合併して発足した総人口28,248人(平成26年12月1日現在)のまちです。鹿兒島県・宮崎県・熊本県の県境に位置する県本土最北の市で、川内川の水系を中心に広大な水田が開けています。写真は「曾木の滝公園」。滝幅210m、高さ12mという壮大なスケールから「東洋のナイアガラ」と称される曾木の滝には、多くの観光客が訪れています。